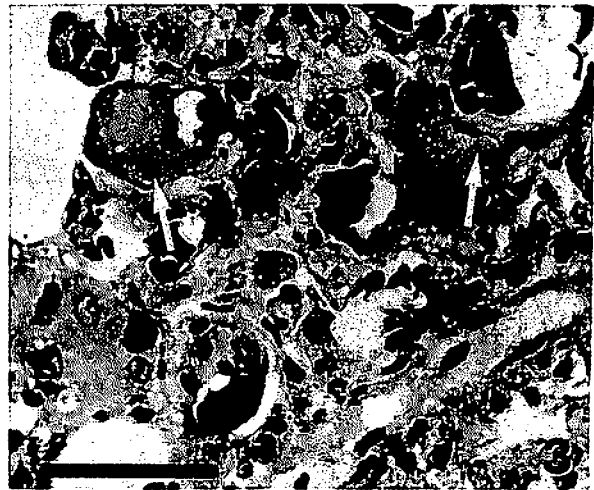
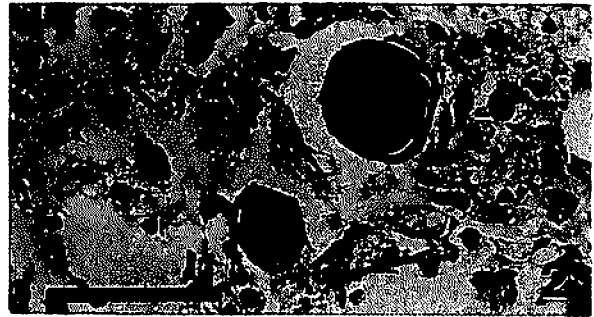
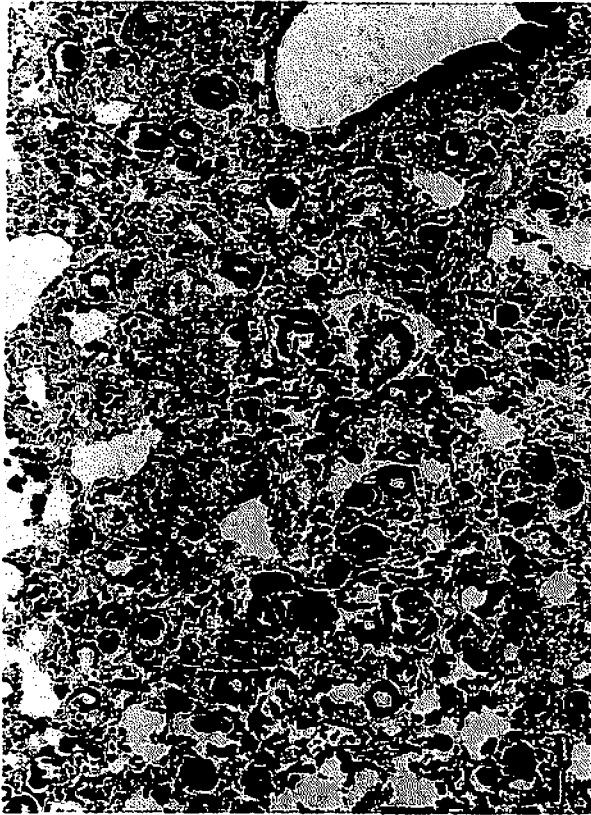


ナキウサギの肺

東京大学医科学研究所獣医学研究部出題

第21回獣医病理学研修会標本No.344



動物：アフガンナキウサギ (*Ochotona rufescence rufescence*), 14ヵ月齢, 雄。8ヵ月齢でフランスから輸入, その後種親として飼育していたが, 繁殖成績不良のため剖検を行なった。症状は特になく, 剖検時, 肺表面に針頭大白色硬結節をわずかに認める以外, 各臓器に著変はなかった。

病理組織学的所見：肺では左側後葉において最も顕著に後葉気管支周辺のびまん性間質性肺炎が見られ, 微小結石状構造物が散在性に認められた (写真1, bar=50 μ m)。同様の病変は他の葉にも見られたが, その程度はあまり激しいものではなかった。肺泡中隔におけるマクロファージの増生が顕著で, 多くは細胞質中に微細空胞を有していた。このため中隔の肥厚は著しく, 病変中央部では肺泡腔はあまり認められなかった。さらに気管支, 細気管支, 肺胞管内腔には泡沫状マクロファージが出現していた。間質には一部好酸球および偽好酸球浸潤巣を認めた。微小結石状物は, ほとんどが肺胞内に位置し, 直径は10~60 μ mのものも多く, 大型のものでは肺胞内を占有するものも見られた。同心円状層状構造が見られ, 全体がヘマトキシリンに強染, 一部のものでは中心部の核

様物があわせて好酸性を呈していた (写真2, bar=50 μ m)。また異物巨細胞も多数出現し, 構造物を包囲する像も見られた (写真3, bar=50 μ m)。

微小結石状物はKossa 鍍銀法で黒色, プルプリン染色で赤色に染まり, 石灰塩を含むと考えられた。さらにpH 2.5アルシアンブルー染色, トルイジンプルーメタクロマジー陽性で, 酸性ムコ多糖類を含むと思われたが, 同時にPAS染色弱陽性であった。

本例においては上皮小体その他の臓器に著変は見られなかった。

本症の病理発生は不明であるが, 少なくとも組織学的には病原微生物の関与を思わせる所見はなく, 集団発生は見られていない。ヒトにおける類似の病態については粘液の分泌過剰なども原因として考えられている。本例では気管支上皮等には過形成, 分泌亢進像は見られなかったが, 酸性ムコ多糖類と思われる物質を基質に石灰化が進んだとも理解されるため, 飼育環境の変化にともなう肺胞上皮等からの分泌変化なども病理発生に関与しているのではないかと推測される。

病理組織学的診断：間質性肺炎をともなった肺胞微石症。